10日に「ビオトープフォーラム in 極寒の地・幌加内2015」

日本ビオトープ協会 野澤副会長が基調講演

地元の内海さんが実践事例を紹介

さまざまな生き物が地域固有の自然生態系を構築したビオトープ――。このビオトープの保全を促したり、復元・創出する活動を続けるNPO「日本ビオトープ協会」（本部・東京、櫻井淳会長）は十日、「ビオトープフォーラムin極寒の地・幌加内2015」を町中央公民館住民研修室で開く。石油資源が量的下り坂を迎えるとする学説「ピークオイル」を時代背景に急激な人口減少社会に向けて目指すもの――をサブテーマに掲げ、同協会の野澤日出夫副会長が基調講演するほか、幌加内在住の内海千樫さんがビオトープの実践事例を紹介する。

内海さんのビオトープ内であったヒメギフチョウの産卵＝内海さん提供

同協会と内海さんが代表を務める「北海道幌加内ビオトープ研究会」の共催事業。内海さんのビオトープが同協会の「一四年度 第七回ビオトープ顕彰」で、審査委員長賞に輝いたことを記念したフォーラムだ。

基調講演で、野澤副会長は「ビオトープと生物多様性――心地よく豊かに生き延びるために」をテーマに話す。

引き続き、「日本ビオトープ協会北海道東北地区委員会」の佐竹一秀委員長が「震災復興・自然環境の復活とビオトープ」と題して、東日本大震災に伴う被災地仮設住宅にアサガオなどを植える「緑のカーテンプロジェクト」の取り組みを紹介する。

幌加内町最北端の母子里を研究フィールドにする北大雨龍研究林の吉田俊也林長が「幌加内の自然――森林を中心に」をテーマに話す。引き続き、内海さんがビオトープの実践事例を報告する。

内海さんは、自宅敷地内（幌加内町雨煙内）で、ビオトープに取り組む。「第七回ビオトープ顕彰」では、自宅前の雑木林およそ八千平方㍍と草地四千平方㍍の計一万二千平方㍍が審査委員長賞に輝いた。

「日本最寒の地 幌加内ビオトープ」で、雑木林・沢・池・草地で形成し、チョウの食樹と食草が自生している。これに近くの山野から移植したイラクサ・オクエゾサイシンを根つかせ、多くのチョウが生育できるようにした。

内海さんは、ミヤマカラスアゲハやアゲハの食樹であるキハダを自らのビオトープに移植。ミヤマカラスアゲハがキハダの葉に卵を産み付け孵化（ふか）し、蛹（さなぎ）から羽化して飛び立つまでを細かく写真撮影しながら観察した。山野から採取したオクエゾサイシンをビオトープに移植し、ヒメギフチョウも産卵させた。

北海道にビオトープの概念を広め浸透させたい――。協会と内海さんは、フォーラムにそんな願いを込める。

一方で、石油資源がすでにピークを迎えているという学説に立って、ビオトープの基本となる自然環境の保全・再生に取り組みながら、太陽光や風力などの再生可能エネルギーへの転換を図ることで地方創生（豊かな暮らし）の道を探るフォーラムでもある。

内海代表は「ビオトープについて、このフォーラムを機会に多くの人に知ってもらいたい」。

午後一時半開会で、午後四時半終了。無料で予約不要。希望者は直接会場へ。

問い合わせは、町地域振興室（℡0165・35・2121）、内海さん（℡0165・35・3412）へ。

◇

当日、フォーラム会場近くの町交流プラザで、「新そばファン感謝祭」がある。午前十一時～午後三時。

北空知新聞

発行所
北空知新聞社
購読のお申込み・ご意見・ご要望は
〒074-0001
深川市1条11番16号
TEL（0164）23-5509
FAX（0164）23-5529
メールアドレス
kitasorachi@galaxy.ocn.ne.jp

医療法人アンリー・デュナン会
深川第一病院
病院長 林 憲雄
内科・消化器科・リハビリテーション科・眼科・歯科・歯科口腔外科・糖尿病専門外来
深川市あけぼの町1番1号 TEL23・3511

管内の天気予報

日付	10(土)	11(日)	12(月)	13(火)
天気				
最高	18℃	18℃	13℃	13℃
最低	7℃	6℃	4℃	3℃
降水確率	30%	60%	60%	50%

観想

「みぞれ交じり？」。デスクの素っ頓狂な声が飛ぶ。記者一年生のときだった。

「おまえなぁー、『みぞれ交じり』なんて日本語あるか！」。上司に叱られた。秋深まる、と、思い出す。

発達した低気圧の影響で八日午前、北空知管内を暴風雨が襲う。収穫後の水田が寂りょうの情景と化した。

米価が昨年のようだと生産者の懐も寂しくなる。基幹産業のコメが、かんばしくなければ地域経済は冷え込む。

電線を容赦なくぶらぶらさせ、樹木を揺らす不気味な音を聞きながら、若年期の「みぞれ交じ